

# 日本名婦伝

太閤夫人

吉川英治

青空文庫



寧<sup>ね</sup>子<sup>ね</sup>は十六になつた。

妹の於<sup>お</sup>ややと二人して、伯父伯母にあたる浅野家に養われて来た。ふたり共、養女なのである。

世間は知らなかつた。それほど、浅野又右衛門夫婦の愛は、世の親たちと変りなかつた。

十六というと、寧<sup>ね</sup>子<sup>ね</sup>も人知れず、「女の先」を考え始めた。時代は早婚の風である。もう他から結婚のはなしがいろいろ持込まれるのであつた。

その数々の縁談はなしのくちで、親たちの眼えに選り残されているのは、

もちろん皆、尾張清洲きよすの織田家中ではあるが、とりわけ、

藩の侍頭さむらいがしら大学だいがく信盛のぶもりの舎弟さくま、佐久間左京

信長の小姓組こしょうぐみ、前田犬千代いぬちよ

槍組衆の河尻与兵衛かわじりよへい

足輕三十人持、御小人組小頭おこびとぐみがしら木下藤吉郎とうきちろう

——などの四名が候補になっていた。各に特長もあり理由もあつて、

「急ぐこともないから、よう生涯を考えて——」と、寧子ねねにも告げて、宿題の予日をのこし、親たちも先方へ、まだはつきり返辞をしない程度になっていた。

四人の候補のうちで、最も身分の高いのは、佐久間左京であった。兄大学のふもり信盛は、愛知郡あいちごおり山崎で、出城でしろとはいえ、一カ城の城持ちであり、左京も織田家では、重要な地位を占め、主君のおおぼえもよかった。年齢は二十三歳とかいう。

「申し分はないが、何せい、こちらはゆみのしゅう弓之衆の長屋住い、身分がちがいすぎる」

と、又右衛門夫婦は、その点で迷っていた。

総じて、尾張半国の小藩にすぎない織田家は、君臣ともに、質

素で財力も乏とほしかつたが、わけて浅野又右衛門は、小しょうろく 禄ろく な弓組の一家士でしかなかつた。

年ごろの娘ふたりに、人なみの教養もさせ、人知れぬ「聳むことり」の支度をしておくだに、なかなか容易ではない家計だった。

その点では、

家庭へもよく遊びに来て、気心もおけないし、先の人がらも素す 姓じようも知れている前田犬千代は、

「寧ね子ねも、嫌ではないらしい」

と考えられて、親たち自身の心もだ**いぶ**傾かたむいていた。

難をいえば、犬千代は感情につよく、同僚などとも刃傷沙汰にんじようざたを起して、殿の勘気をうけたりしたこともあつた。素行そこうも放ほうじゆ

縦うのように思われる。また、美丈夫なので、寧子とのあいだに、恋愛でもあるかのようなうわさも撒まかれた。年は二十四歳、寧子も望んでいるらしいし、ふさわしい聳むことは思われるものの、まだ又右衛門夫婦の決心は、はつきりせずに在る。

では、河尻かわじりよへえ与兵衛はというに。

これなら剛健で、武勇は槍組の随一と聞えているし、戦国の士として、負けひ目は取らないが、ただ寧子とはあまり年がちがう。それに一度妻をもった人でもあるし、

「かわいそうではありませんか」

と、又右衛門よりは、妻のほうが、気のすすまない顔いろだつた。

殆ど、問題にしていけないのは、つい近頃、小者からやつと士分になつたばかりの男で、まめに足を運んで来る木下藤吉郎という男だつた。

「かなわぬよ、あの男につかまると」

又右衛門も、閉へい口こうしている。こちらでは問題としなくても、

先は熱心を冷さまさないのである。物を届けて来る。些ささい細さいな用でもすぐ来る。無くてもやって来る。来れば話しこむ。——その末には、

「どうぞでしょう。決して、寧子どのを、不幸にはいたしませんが。

——それだけは誓えます」

などと縁談はなしは、聳たかどの直接なのである。



その懸命さに、つい膠にべのないこともいえず、

「まあ、考えて」——とか。

「寧子の胸もきいた上で——」

とか、云つて来たのが悪くもあつた。近頃では、又右衛門も持て余していた。といつて、応じる気には毛頭なれないのだ。どうながめても、

「この男の将来では、まあ百貫ろくの禄でも取られたら関のやま。生涯、妻に不幸な目は見せぬ、などと云いおるが疑わしい」と、考えられるからだつた。

又右衛門の評価は、まだまだよいほうなのである。世間では、彼が低い小者勤めをしていた頃の呼び慣ならわしのまま、いまだに、

——猿。猿。

と呼んで、藤吉郎とは云わぬ者のほうが多い。

家すじも、中村の百姓だとしか聞かないし、現在も、土分のうちでは一番下の軽輩だし、顔は、猿に似ているし、風采といったまこと寔にあがらない小柄なほうだ。取柄とりえといったらただ、

「おもしろいお人や」

と、台所の下婢かひどもや、下僕しもべなどから、自分たちの仲間のように思われて、人気のあることだけだった。

だから、寧子ねねや、妹の於おややまでが、彼の姿を門に見れば、

「——お父さま、また木下様が、お越しですよ」

と、理わけもなく、おかしがるのが先で、眼のうちにも入れていな

かった。

三

永禄えいろうく四年の六月、桶狭間おけはざまの合戦の翌る年。

津島祭つしまりのある頃だった。

やぶ蚊ゆみのしゅうの多い弓之衆ゆみのしゅうの組長屋で、一組の智ちとり祝しゅうげん言げんがあつた。

智ちどのは、当年二十六歳の木下藤吉郎で、むしろ寧子ねねのほうから望んでにわか遽にわかに挙げられた婚儀と聞いて、

「へええ？ 猿が、あの寧子どのと？」

と、世間には、幾つも呆れ顔あきが出来た。

世間の驚いたのも無理もない。親の又右衛門夫婦ですら、その晩、婚儀の席に並んだ者のはなしを聞けば、

「何やら、力落しの態で、浮きもせず、世間に肩身のせまいような顔してござった」という。

なお。——当夜の模様はと、問いただせば、

「板屋びさしの弓長屋に、ひっそり縁者どもが寄り、簀搔すがきわら藁わらを床とこにしいて、うす暗い短檠たんけいの明りが三ツ四ツ、聶なつどのと花嫁が中ほどに坐つて、形ばかりの杯さかずき事ことをしたまでのこと——」

と、如実に語つて、

「——花嫁の気は知れぬが、たださしうつ向き、聶なつの猿さるどのは、

けろりとしたものよ」

ということだった。

聞く者は、もう一度、唾然とした。

#### 四

足輕三十人持の小頭こがしらといつては、まだその足輕よりすこし足たしなくらいの生活でしかない。清洲きよすの侍さむらい小路こうじの裏に、若い夫婦は、初めて小こやかやかな家と鍋釜なべかまを持った。

織田家はその頃、隣国の美濃みのの斎藤方へ、しきりと攻略を計っていた。良人はたえず家にいなかった。時には、木曾川の国境へ

遠征し、稀 《たまたま》、帰つて来ても城内の寝泊りが多いし、まだ二十歳にもならない新妻は、常に、陰膳かげぜんばかり供えて、独りで喰べ、独りで縫い、独りで家事を見ていた。

けれど、その良人が、稀に家にあつて、

「寧ね子。寧ね子」

と、朝から晩まで、快活な声で、寛くわいでいると、彼女は、百日の苦も、一年の留守も、物のかずではない。しんから今の生活がさむらい楽らしまれた。

「侍さむらいの妻とは、不びんなものだ。——だが、こうして殿とのからお暇やすみをゆるされて、家にある一日だけは、気儘もいうがよい。おれのからだ体は、そなたのものだ。そなたの体はまた、おれのものだし……。

はははは」

どこまで、明るい人である。寧子は、持った良人を、いつも改めてそう見直した。そして、自分の求めた結婚に、悔いるような気持は一瞬でも起らなかった。

ある時、ふと、

「寧子。そなたは、わしを知った最初は、わしが嫌いだったろう」  
そんなことを、良人は訊たずね出した。

正直に、寧子は、ほほ笑んで頷うなずいた。

「ええ」

「それが、どうして遽にわかに、わしと生涯を暮す気になったのか」

「それはこうです。いつかあなた様が、中村のお母様のところへ

上げるお手紙を、何かの品と一緒に、お忘れになつて行つたでしよう。実は、妹がわたくしにそれを見せたので、あの中の御孝心ふみなお文ふみに心をうごかさされたのです。……そればかりではありませんが、それから他よそながら、あなたのお勤めぶりや、おはなしの端は々しばしにも、心をひかれるようになったのでございました」

云い終つて、寧子は、顔を紅くした。

すると、良人は、

「そうか。やはりそうか。実申せば、あの文ふみは、そなたの心をうごかすため、わざと置き忘れて行つたのだ。はははは、そなたはわしの兵法で、まんまと擒とりこ人になつたんだよ」

手を打たないばかり、欣うれしがって笑うのだった。



けれど寧子は、すこしも興ざめな心地はしなかった。なぜなら良人の孝心は、決して嘘でないからである。中村の田舎にいる母親に対する藤吉郎の孝心は、離れてこそいるが、恋妻の自分にしてくれる以上であつた。戦場からよこす便りにも、母の事を書いてないことはないほどだし、家に戻つても、ここにはいない母親のうわさをしない日はなかつた。

「かみしんじん ほとけ神信心、ほとけ仏信心もだが、わしの胸には、どこにいても、母がいるからな。母を思い出すと、悪い事はすまいと思う。善い事はしようと思う。そして良い子をもってしあわ倅せだと、母に欣んでもらいたいと思う」

常々、藤吉郎は、そう云つた。

また――

「わしの願いは、中村じゆうで一番の不<sup>ふし</sup>倖<sup>あわ</sup>せ者じやつた母を、日本一の幸福者にさせてお上げ申したいことだ……」

と、云いかけて、後は、寧子の顔を見て笑つた。そして、何を云うかと思えば、

「そして共々、この女房をもな――」

と、彼女の美しい鼻を、指でついた。

五

猿。猿。――猿の妻。

添うてからも、幾年かは、辛い声を、時折聞いた。世間の軽蔑は去らなかつた。

自分が云われるよりも、良人の云われた場合に、寧子は腹が立つた。けれど良人は意にかけるふうもない。笑うのみである。

いつか彼女も、良人に訓練されて、笑つていられるようになった。

がしかし、それも、良人が洲股すのまたの築城をなし遂げて、一躍、五百貫の恩地と、一城の守将という地位とを克ち獲ると、世間は今さらのように、

「怖るべき男」

と、藤吉郎を見直して来た。

寧子はひそかに、自分に誇った。よくぞ生涯の人を選んで過あやまらなかつたと、未婚の頃の岐路を顧みて思うことが多かつた。

ただ。

良人の立身と共に、彼女にはべつな困難が加わつて来た。それは、良人の累るいしん進に、自分の教養が——劣らない妻としてゆくことが、ともすれば、追いつけなくなりそうな点であつた。

家臣は多くなる。一族はまわりに持つ。経済は膨ぼうだい大になつてゆく。君侯への心くばりから、使者の往来といったような社交。良人の身まわりもまるで違つてきた。

その繁忙の間にも、夜々の暇をぬすんでは、修養を加えてゆかなければ、以前の一藤吉郎ではない——羽柴筑前守秀吉の妻と

して、いやでも取残されてしまいそうだった。良人の事業と栄進とは、そのために、どんなに愛している妻でも、妻のために、待っている理はないからである。

結婚してから、いつか、十一年は経っていた。

主君の信長が、尾張半国から興つて、今川を討ち、美濃みのを経略し、居城も清洲きよすから小牧山こまきやまへ、それからまた岐阜ぎふ城じょうへと移つて、尾濃びのう百二十万石を治めるようになると、秀吉もそれまでの功によつて、近江おうみ長浜ながはまの城主二十万石という大身になっていた。

「寧子ねね、そなたは、女子にめずらしい者じゃ、偉いものと、秀吉も今にして思う」

「お戯たわむれ遊あそばしませ」

「いや、真まことだ。足輕に毛のはえたくらいな身分であつたあの頃のわしを——良人に選んだ眼は、処女おとめ頃の女子として、偉いといわねばなるまいな。——そのむかし、わしがまだ十八歳の頃、針売りなどして諸国をさまよい歩いてきた艱苦の頃だ。庄内川の河原で、信長公の御馬前へ駈け伏したところ、そのまま召しつれて、草履ぞうり取りにお使いくだされた御主君のお眼もだが——そなたは、御主君に次いで、この秀吉の人間を、見とおした偉い女子じゃ、賞ほめてつかわす」

「そうお賞めいただくと、寧子は汗がながれます」

「なぜか」

「こんなにまで、あなたが御立身なさろうとは、寧子も思ってお

りませんでしたから」

「あははは、それはそうかも知れぬ。この秀吉も、思つておらなかつたからな」

「では、あなたは、御自身どれくらいまで、御出世遊ばそうと、考えておいでになりましたか」

「いや、わしはな、そう上を望んだことはない。草履ぞうり取りをしておる時には、御主君のお草履をつかむ仕事を精いっばいに勤め、士分になれば士分の仕事を精いっばいに、一城の主となれば、一城の主を精いっばいやりおるだけじゃ。——だから今も今を精いっばいにやつておるに止る」

秀吉夫婦のこういったふうな話は、侍臣の前でも、奥女中たち

の居並んでゐる所でも、声を密めるひそなどということはなく、至極、明けつ放しに交わされるのであつた。

以前の貧乏ばなしなど、わけて少しも、隠して銜てらうふうはなかつた。

秀吉が宿望であつた、故郷の母も、長浜の城に迎えた。

姉も弟たちも、寧子の一族たちも、皆、彼を繞めぐつて、門戸の榮えに恵まれた。

「わしに仕える心を、母につくしてくれ。母が歡べば、わしは自分につくされたより欣しい。ありがたい」

秀吉が、寧子へいう、口癖であつた。

母はもう五十であつた。まったく田舎の一老媪おうなである。果報に



すぎると、常に勿体ながるばかりであつた。その母は、誰よりも、寧子が氣に入つていた。

夜の伽とぎに、母を中心に取巻いて、

「お母様、お聞きください。わが良人つまが、わたくしを娶めとる時には、お母様へのお手紙を、わざと忘れ落したふりして、わたくしの心をうごかしたのでございますよ。いわば親孝行をおとりに遊ばして、おとめごころ処女心をだましたのでございます」

などと思ひ出ばなしを、戯れに告げると、

「まあ、悪い子じやなあ」

と、母はおかしがつて、また、中村時代の手に負えなかつた秀吉の——日吉ひよしといつた時分の悪戯いたずらぶりだの、奉公先からおしり

ばかり持込まれたことだの、喰べるに物もなかつた貧苦の中に泣かされたことだの、寧子にはなして聞かせるのだった。

「どうして、まだまだこの子には、小さい折の面影がたとある。そなたも、上手に騙たぶらかされぬがよい」

母が、寧子に味方して云うと、秀吉は大いに懼おそれをなして、

「いけませんなあ。折角、秀吉がよい女房に仕立てておるのに、母上こわがそうお壊こわしなされては」

と、慌あわてて、次のことばを、抑えるまねした。

近きんじゆう習うたちも笑えば、侍こしもと女たちも、笑いこけるほどであつ

た。そして周囲は、主人の物質的な栄華よりも、その睦むつまじさに、心こころから羨うらやましさを覚えるのだった。

## 六

誰へも、洩らしたことはない。どんなことでも隠さない母へも——である。寧<sup>ね</sup>子は、ひとりで、悩むことがあつた。

それは秀吉の浮気であつた。自分のほかに、愛する女性のできたことである。

「貧しい細長屋で暮らしていた時のほうが……」

と、今の栄位を、むしろ厭<sup>いと</sup>う気さえこの頃は起つた。徒<sup>いたずら</sup>に、清<sup>き</sup>洲<sup>よす</sup>時代の小やかな二人暮しの時ばかり振返られて、良人の内助に、ふと、心のゆるむ日もあつた。

その良人に代つて、岐阜城の主君の許へ、使いを命じられた。長浜の絹、琵琶湖びわこの鮮魚など、心をこめた土産の数々を、荷駄組にだぐみの武士に運ばせ、彼女は、華麗な奥方用の塗駕籠ぬりかごに、多くの侍女や侍を従えて岐阜に赴いた。主君に会つて、使いを果してからである。信長はくだけて、

「どうだな秀吉は、相かわらず元気に、毎日をおもしろく暮しているだろうな」

などと、いろいろ家庭の内事まで訊かれたので、寧子ねねも女ごころについ、

「何事も良人のなさることには、不服を申しませぬが、どうか余り夜の局つぼねへしげしげお通かよい遊ばすことはないように、どうぞお上

から仰つしやつて戴きとう存じまする」

と、おもて面には笑つて頼んだ。

信長も、苦笑しながら、

「よしよし。わしからもよく云つてやる。そのほうにかけては、くせの良くない男だからの」

と、慰め返した。

すると、日を措いてから、主君の信長から、寧子へあてて書面がとどいた。いつぞやの土産物の数々の、実に見事であつたことなど、したた欣びを認めた後で、

——おお仰せのごとく、こんど、この地へ、はじめて越し、け

んざんに入、祝着に候……其そこもと許の眉目みめぶり容かたちまで、いつぞ

や見まいらせ候折ふしよりは、十のもの二十ほども見上げも  
うし候

藤吉郎、れんれんと、ふそくの旨むね、申すの由よし、言語ごんごどうだ  
ん、曲事くせごとに候が、何方いずれを相たずね候とも、また二たびは、  
求めがたき夫つまにもあれば、其許そこもとにも、おもおもしろく、りん  
気などに立ち入りては然るべからず、ただし、おんなの役に  
候あいだ、ふんべつにて、程ようあるは、あしかるまじ……  
などと婉えんきよく曲にはあるが、寧子ねねの悩みに、誠いましめを与えてい  
た。寧子ねねは、それを見て、後では、

「なぜ、御主君などへ」  
と、深く悔いた。

そして今さらのように、女ごころの不覚を知った。意志のつよいつもりでいる自分にも、脆もろい一面を気づいて、自分を恐ろしいと思つた。

その心をもつてその日から、彼女は改めて、良人に侍かしずいた。良人の愛は、以前より勝つても、變つてはいなかつた。愛を疑う時、愛はすぐ黒い雲に變るもの——と、寧子はひそかに良人に詫わづらびた。それから間もなく。

秀吉は軍をひいて、中国へ出征した。

長い留守がつづいた。何年も、何年も。

そのうちに——天正十年五月、上洛中の主君信長が、叛はん臣しん光み  
秀つひでのために、本能寺ほんのうじで討たれた。

變が伝わると共に、秀吉の留守城長浜は、明智光秀に加担の阿あ部べ淡路守あわじのかみの軍勢に攻め襲よせられた。

寧子は静かに、留守の一族や侍たちへ殿軍しんがりのさしずをした上、侍女たちの手もかりず、自分の背に母を負つて、慥しっか乎かと結ゆいつけ、片手に薙なぎ刀なたを携えて、東浅井郡ひがしあさいごおりの山奥、大吉寺だいきちじへのぼつた。

母を、寺内にかくして、夜も昼も、彼女は門前に立つて固めた。侍女たちを入れても、五十人に足りない手勢であつたから、もし敵がこれへ来たら、斬死きりじにの覚悟であつた。——だがそうしてもなお、留守の良人に詫びきれない心地のものは、母の身に万一のこともあつたらということであつた。良人の孝心を思うと、逃



げきれるだけ逃げのびたいし、武門の妻であることを思うと、

「秀吉の妻として、笑われぬよう」

と、悲壮な斬死へ、気は逸<sup>はや</sup>つた。

## 七

わずか十日余りだった。

秀吉は、変を知ると、中国高松城の水攻めを、毛利家との和睦<sup>わぼく</sup>に中止して、疾風のごとく陣を返し、山崎の一戦に、光秀を葬<sup>ほうむ</sup>り去った。

長浜城は、奪回した。

秀吉は、大吉寺の山へ上つて来た。

真つ先に、母のすがたを求めて、オオと呼ぶ母を見ると、

「おつ母さん！」

子どもみたいに縋つた。

それから、

「寧子<sup>ねね</sup>。寧子<sup>ねね</sup>つ」

と、呼び立て、

「よくいたした。よくいたした。それでこそ秀吉の……」

妻と手を取り合つて、泣いているのである。

寧子<sup>ねね</sup>は、ものも云い得ない。ただ体<sup>からだ</sup>じゅうの顫<sup>ふる</sup>えるような歡び

につつまれている。人間と生れなければ——人妻となつてみなけ

れば——また、こういう難儀をも突きぬけてみなければ——この  
歡びを生命に味うことは出来なかつたろう。そう落着いた後では  
思つたことであつた。

ふたりの間の愛も。

二十歳だいの頃、

三十の頃、

また、四十をも越えた今。

——と顧みてくると、愛そのものの動かぬ相にも、自然その深  
度と意義には、年と共に変化があつた。お互いに培つて来た努力  
がようやく、ほんとの夫婦愛の実となつて、今、結ばれているの  
が分つた。

何かしら、その頃から後の彼女の胸には悠ゆつたりと、大きな安心がすわっていた。

春の海のようにそれは寛ひろい。

秀吉の側室そくしつに、うら若い淀君よどぎみとかいう美女かみずが侍かみずくようにな

つて、閨門けいもんを繞めぐる奥仕えの者たちから、いろいろな曲事ひがごとが聞え

て来ても、その寛やかな彼女の胸に、小波さざなみも立てることはできなかつた。

時に、怒濤どとうは立つかもしれない。幾歳になつても、女性の血は女性の血であるから。——けれど、彼女のそばに常にいる召使いこも、時折に伺候する家臣も諸侯も、彼女に会えばいつも花の木陰こかげに憩いこうような平和をおぼえた。春の海に向うような寛さを覚えた。塵ちり

ほどな気色でも、淀君に対してうごく色を見たためしはなかつた。すでに、秀吉は、太閤といわれ、その母は、おおまんどころ大政所うやまと敬われ、そして寧ね子ねは、北きたの政まん所どころと称なづされていた。

いうまでもなく、大坂城にあつて、天下を統すべている秀吉であつた。

その秀吉の不足と、彼女のたつた一つのさびしさは、遂にまだ、二人の仲に子のなかつたことである。

## 八

淀君には、子が生れた。

鶴松君つるまつぎみといつたが、嬰兒あかごのうちちに早世した。

次に、拾君ひろいぎみを生んだ。後の秀頼ひでよりである。

北の政所まんどころもあるかなしかのよう、淀君の勢力は、自然大

坂城おおに偉おほきなものとなつた。

こんな事もあつた。

佐々成政さつさなりまさが、北国すじの地侍じぎむらいへたのんで、白山はくさんの

黒百合を取りよせて、北の政所へ献上した。

めずらしい高山植物の花だつた。黒いばかり濃紫こむらさきの百合で

ある。北の政所は、

「ひとりで慰むのも、花に勿体ない心地がする」

と、茶会を思い立って、利休りきゅうの娘で、鴟屋もずやの妻となつていた

お吟ぎんを召しよせて、趣好を相談した。

何かの打合せをすまして、お吟ぎんが西の丸から退がつて来ると、淀君付の局つぼねが待っていて、

「そつと、淀君さまからのお訊たずねじゃが、そなた、何の御用で、西の丸へは伺ったか」

と、廊下の端はしで訊かれた。

お吟は、ありのままに、

「めずらしい黒百合がお手に入りましたので——」

と、茶会の趣好をはなした。

茶の日には、淀君もよばれていた。人々はみな、珍しかったが、

淀君は、黒百合のことを、よく弁わきまえていたので、

「お智識でいらつしやいますこと」

と、人々は感心して聞き入った。

それから数日たつと、こんどは淀君のほうの催しで、「花摘みの会」の招きがあつた。殿中の廊下には、たくさんの花桶が並べてあつて、各々が心まかせに、好みの花を摘んで、挿けたり、家土産づとに戴いて帰つた。

ところが、いつぞやの黒百合と同じ花が、他の雑な花と一緒に、一つの花桶に突つこんであつたので、人々は、

「まあ何として? ……」

と、眼をみはつた。

その皆の眼は折ふし来合せた北きたの政所まんどころの面おもてをお気の毒で見



るにたえないというように外<sup>そ</sup>らしあっていたが、北の政所は、花桶に眼をとめると、

「おお、たくさんにある……」

と、微笑<sup>なご</sup>んだだけだったので、その和<sup>なご</sup>やかな面<sup>おもて</sup>をながめた人々は、

「今日の花の、どの花よりも美しい」  
と、ひそかに思った。

## 九

太閤の母、大政所は、八十歳を一期<sup>ご</sup>として、聚<sup>じゅらく</sup>楽で亡くなっ

た。

薨去こうきよの報しらせを、太閤は、名護屋なごやの陣で知つたのである。彼は生涯の大事業としてゐる朝鮮役の出征にかかつていた。

軍事を措いて大坂へ歸つた。

——が、臨終には間にあわなかつたのである。もう老齡な子は、母に取りすがつて、人前もなく歎いた。

日本を統一し、海外にまで余力を展のばして、大陸経営まで抱負してゐる大氣宇だいきうな太閤が、

「寧子ねね寧子。もう何を張合あいに」

と、泣いたということである。

寧子は、大政所の病中、帯も解とかないほどだった。彼女も急に

老いていた。

「お察しいたします。けれどあなた様にはまだ、大きな御使命がございましたよう。……寧子は、何をあてに、この先の日を」

高野山に青巖寺せいがんじを建て、諸国に供養所を興して、亡母の冥めいぶ福くを禱いのつても、秀吉の心は、なお癒いえなかつた。

朝鮮陣の半なかば、太閤もまた、六十三を一期ごに、薨去した。

「……寧子」

わかれには、たった一言、そう云つてにこと、顔を見あわせたのみであつた。

北の政所は、大坂城を退いて、京都の高台寺の峰に、一寺を建てて、ひとり清らかに住んでいた。——いやほど近い阿弥陀あみだヶ峰みね

の土に眠る太閤を、朝夕に訪れるのを楽しみとして。

淀君の生活は、彼女とは反対に、それから遽にわかな爛らんじゆく熟じゆくを迎え

た花のように咲けるだけ狂い咲きに咲いて、そして、元和元年げんなの夏の陣に、大坂落城の炎ほのおに散った。

子の秀頼も。一族も。

彼女を繞めぐる無数の男女の召使までも、また、太閤の遺のこしたあらゆる物も——愛情までも、その焦しょうど土とうへ投げこんでしまった。

真つ赤な天は、ふた晩も三晩も、京の高台寺の峰からもよく見えたとした。

そこも阿弥陀あみだヶ峰みねも、颯々さつさつと、冷たい松風のみであった。

家康も、そこへは兵を上げなかった。

むしろ敵の家康まで、彼女の才徳と貞操を感じて、寺領を寄進したり、何かと生涯の面倒を見るように、所司代の板倉勝重<sup>かつしげ</sup>へ  
いいつけたほどであった。

寛永元年の九月、彼女は安らかに世を終った。

六十七歳まで——死ぬるまで、彼女は太閤の愛に抱かれていた。



# 青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「主婦之友」

1940（昭和15）年3月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：雪森

2014年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 日本名婦伝

## 太閤夫人

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 吉川英治  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>